



## 本当の戦争を知り、

### 平和について考える

Cグループ（植村潤也、堤美沙、富樫亮太、富樫祐太）

広島に行つて調べたいと思つた事は、たつた一発の原子爆弾で広島にどのような被害が及んでその後の広島はどう変わったのか、という内容が私たちの主なテーマでした。

8月5日、広島への原子爆弾投下から2万5千932日目。本日は平和記念公園内で原爆にまつわる碑めぐりから行いました。

嵐の中の母子像は、右手に子を抱え、左手で幼児を背負おうとしなが

らでも生き抜こうとする母の姿を表しています。これを見た時、辛い体勢になつても、我が子を護り抜いてやるという、母の強い思いが伝わってきます。爆心地である「島外科内科」ではガイドの平原さんから熱心な説明を受けた後、追悼の意を捧げ、相生橋に着きました。相生橋はT字型の特徴的な形から原子爆弾投下の目標にされたといわれています。

8月6日、原爆が投下されてから71年の月日が経つたこの日、人類史上最初の原子爆弾が投下され、幾万という人々が炎に焼かれました。平和記念式典での平和宣言には、私たちはヒロシマの思いを基に情熱を持って連帯し行動するべきだ、多様な価値観を認め合いながら「共に生きる」世界を目指し努力を重ねなければならぬ、と人類の未来について強く「警告」していました。

この広島で、あの日たつた一発で多くの命を奪つた原子爆弾を忘れません。平和を守ることが命、即ち地球を守ることに繋がっています。これからは、世界恒久平和の実現に向けて、まずは人と仲良くする事から始まります。

そして、世界の人々が仲良くなり核兵器がなくなれることを私たちは願っています。

## 平和について

Dグループ（藤田美由貴、船木さくら）

私たちがこの「広島平和記念式典派遣事業」に参加した理由は、学校の見学旅行で長崎に行き、広島についても知りたいと思つていたからです。私たちは復興がどのようなに行われ、現在の広島の様になつたかを知ることが重要だと考え、「広島被害と人について」をテーマにしました。

私が広島に行つたり、調べたりして思つたことは、「原爆は開発してはならないものだった」「戦争はしてはならない」ということです。原爆は開発してはならないものだったというのはその言葉のとおりです。投下によつてたくさんの方の命が失われることに加えて、障害や病気が、差別をもたらし、戦争が終つて平和になつたと思つていたら病気が発症した、移り住んだ土地で差別にあつたという人はたくさんいたと思います。なぜ戦争が終つたのに苦しめられなくてはならないのか、戦争はまだ終わっていないように感じた人もいたのではないのでしょうか。原爆は今も病気という姿に変わつて人々を苦しめています。ですが、そんな現実がありながらもこの

世界にはたくさんの方の核を使用した武器があります。

世界が平和になるためにはどうしたら良いのでしょうか。それは、助け合うことだと思えます。人と人だけではなく、国と国で助け合うのです。「やつてあげる」という気持ちではなく「助けたい」という気持ちがあつたからこそ、感動し、ありがたいと感じる。その双方の思いが平和に繋がると思えます。簡単に言うなら「ギブ・アンド・ギブ」です。人間の関係も助け合うことが必要です。それはきつと国同士でも変わらないことだと思えます。

広島に行かなければきつとこまで調べ、考えることはなかつたでしょう。この経験を大切に、たくさんの方に拡散・発信していきたいです。

